

## <2009 年度卒業論文 要約・相互批評集>



### <卒論の目標>

まずは何かを論ずるアイデアが必要です。素朴でもいい、借りものではない自分の問題意識。

つぎに、アイデアを表現する論文という形式に則ること。論文とは、随筆にあらず、感想文にあらず、記録にあらず。1) まず、自分のアイデア、そう考えた経緯をわかりやすく説明する。2) それに類することを他の研究者や論者はどのように論じているのか。それに対して、あなたは賛成か反対か。客観的に丹念に論点を整理する。3) 自分のオリジナルな調査や考証を展開すること。既に出された論点に、自分が付け加える論点や反対する論点は何かを示す。論文にとって最も重要なところです。4) 最後に自分の論文をふりかえり、オリジナリティと客観性について再検討する。他の論者に読まれても、失礼な内容になっていないか、テーマに対して十分に誠実であるかどうかを確認する。

その他、表紙、目次、章節の構成、参考文献・資料の一覧表記、本文の内容を補う注などの論文に必要な要素が揃っているかどうか。もちろん、誤字・脱字、ワープロの誤変換がないか。

以上の「論文」という形式を守り、自分のアイデアや問題意識を表現することが、大学教育の集大成としての卒業論文の目的です。

## 我孫子智美

「陸上競技はどうすれば強くなるのか？ —地域スポーツクラブの構想—」

キーワード：スポーツ、陸上競技、学校、企業、地域スポーツ

日本のスポーツは、学校と企業という2つの軸でスポーツを発展させてきた。しかし、スポーツ界・陸上競技界では今、様々な問題が起きている。この大不況で企業側がスポーツから離れ、選手が競技の存続不可能になったという問題。また、政府の事業仕分けでスポーツに対する資金が削減される問題もある。そして、部活動におけるバーンアウト。指導者不足の問題。競技力の低下など数多い。そんな中、広まっている総合型地域スポーツクラブは、現在で一番よいシステムであるといえるが、財源や施設の確保や指導者の確保などで頭をかかえている状態である。こんな今だから、この日本の特殊なスポーツ形態を変えるべきではないか、と思うのである。

ドイツやイギリスでは、国がスポーツクラブや学校をバックアップして、競技力向上やスポーツの浸透に努めている。また、スポーツクラブと学校の連携も親密に行われている。そして、国民自身のスポーツに対する意識が高いことがうかがえた。日本のスポーツに足りない部分はまさにこれらであるといえよう。大学をベースとした地域スポーツを目指すことにより、少しでも改善され、日本のスポーツ力が向上されれば良いと思う。

### 〈我孫子論文への批評〉

陸上競技に関する論文ということで、中学高校の6年間学校での部活動ではあるが、私自身も陸上をしていた経験を思い出しながら読み進めると、私の短い陸上経験でも共感する部分があった。例えば学校スポーツの限界である。私も筆者同様、学校の中ではスポーツは参加自由の課外授業という枠を越え難いと感じる。私は中高一貫の私立学校で競技を行っていたが、目指しているのはオリンピックや世界陸上ではなく、インターハイであり、私学大会であり、2年から3年という期間を持った目標である。私の母校では陸上競技は強くなかったため、当たり前といえばそれまでだが、例えばジュニアの世界大会に進むほど強豪であったフェンシング部の選手も将来フェンシングの選手を

目指している生徒はいなかった。学校内でのスポーツ活動を学生時代に限定した活動であると考えている学生、そして教員は私自身の経験から非常に多いように感じた。そのような共感する問題点にたいして、筆者の考える西洋の取り組みの模倣による若者のスポーツの技術・意識の向上は、容易に実現するとは思えないが、もしも実現したならば有効な手段であると感じた。(三崎)

我孫子さん＝棒高跳びのイメージが一番強い。だから我孫子さんが卒業論文を「陸上競技はどうすれば強くなるのか？——地域スポーツクラブの構想」というテーマにしたのは良かったと思う。なぜなら、競技スポーツをしていない普通の人知らないことや、自分自身体験し実感したことを書けるからである。また、インタビュー調査ではインフォーマントが田尻先生という我孫子さんが高校から付き合いのあるコーチであるので、具体的で深い話が聞き出せていた。ただ、彼女自身現役のアスリートであるから、もっと自分自身の実体験を書き綴ってほしかった。また論文で挙げられていた学校スポーツ・企業スポーツの問題点について彼女の人脈を使って他のアスリートにインタビューしていれば、「現実に直面している財政問題」や「一貫教育が不可能」といった弊害についてさらなる信憑性を伝えられ、地域スポーツの育成を一層主張できたのではないかと感じた。(久我)

陸上競技を続けてきた我孫子さんにしか書けない論文で、独自の視点から話を膨らませていたのが非常に良かったと思います。お疲れ様でした。

また、聞き取り調査の部分も非常に詳しく字数も沢山書かれていましたが、陸上競技を殆ど知らない私でも理解しやすい言葉で書かれていたので、読んでいて分かりやすかったですし、興味もそそられていき引き込まれていく論文で良かったなと思いました。

社会にでてからも、スポーツを続けていくということは環境という視点でも周囲からの理解という点でも大変だとは思いますがこれからも我孫子さんには陸上競技を続けて欲しいです。卒業後も我孫子さんが満足のいく環境の下で陸上競技をつづけることができ、そしていつかオリンピックに出られることを楽しみにしています。応援しています。(松崎)

著者は、棒高跳びという陸上競技で日本のトップに立つ人である。そうなれたのは著者の才能と努力の賜物だが、同時によき指導者にめぐり会い、日本における学校スポーツの限界を克服できたことも大きい。この論文を読んで、そのことがよく理解できた。

では、その延長線上に世界の頂点も見えてくるだろうか。著者が構想する地域スポーツクラブが日本にも実現したら、第2、第3の「著者」は増えるかも知れないが、それが世界の頂点につながるかどうかは別問題だろう。高い山の裾野は広いが、その逆は必ずしも真ではない。その点の考察も深めてほしい。(鶴飼)

## 後藤珠仁

「ファッションと自己表現 ―現代女性の「私遊び」―

キーワード：私遊び、内在化した他者の視線、  
循環的相互作用、三人称の構え、きめわけ

人がファッションを選択する過程において「内在化した他者の視線」からの圧力を受けることが多い。「内在化した他者の視線」によって自分自身を社会的役割、性別、年齢などの観点でとらえる「三人称の構え」と「三人称の構え」からどのように脱却することができるのだろうかという問題について論じる。筆者は現代若年女性の「私遊び」というファッションに焦点を当てた。「私遊び」とは自分自身の体を着せ替え人形のようにして「自分自身のなりたい姿」になりきる行為である。実際に「私遊び」をしている女性に聞き取り調査を行い、また「私遊び」をしたいけれども実行には至らない女性に対して理想の服装に着替えて「自分自身のなりたい姿」になってもらうという交換実験を実施した。聞き取り調査と交換実験の結果から、「私遊び」という「一人称への構え」によって内在化した他者の視線から解放され、おしゃれを楽しむことが可能であるということ、また情報化が進むなかでブログなどによって「一人称への構え」をとることができる場を自ら作り出しているということが明らかになった。

### 〈後藤論文への批評〉

本稿は現代女性がファッションで「私遊び」をするということから、ファッションがもたらす効果について論じられたものである。私も現代を生きる女性として、アパレル・化粧をはじめとするファッションは自分にとっての大切な自己表現ツールであり、趣味であるので、共感する点・新たな発見が多々あり非常に興味深いものであった。後半部分では現に「私遊び」に関する対照的な2人に具体的な実験をしており、よりリアルな視点で論文を読み進められた。

ただ、私なら「どのようにして私遊びをするのか」を分析するだけでなく、「何がそ

のようにさせているのか」という根拠の部分をもう少し掘り下げ、現代社会の時代背景とのつながりや、今後その様な文化はどうなり社会にどういう影響を及ぼすかという点に焦点をあてる。もう少し時代の歴史を追いながら、私遊びに影響を及ぼす外的要因(二人称・三人称)になり得る対象や環境についても考えてみたいと思う。また個人的に、筆者自身の「私遊び」の根拠や動機をもう少し知りたい。(黒岡)

文章に出てくるキーワードが現代的であり、同世代の女性にとってはかなり読み進めやすい内容だった。中でも筆者の体験に基づく実話が時代背景のリアリティを出していた。「今ではアクセサリ売り場で種類が豊富なピアスに対してイヤリングを見つけるのは難しい」や、ファッションによる差異化の説明の項で、親に隠れてピアスを開け、髪を茶色く脱色した筆者の体験に基づく「体を傷つけることによる差異化＝自己表現」という部分での時代のリアリティが感じられた。雑誌「ageha」「popteen」のキャッチコピーの抜粋や今人気のブログを盛んに例として取り上げるなど、今の時代の生のおいを十分に感じさせる論文であると思う。ただ、その分ファッションの歴史についてはあまり触れられていなかったため、もっと詳しく書く必要があったと感じる。

二種類の系統の女性がいかに他者の目線である「三人称の構え」から「私を主体とする」私遊びに興じることで一人称の構えへと脱却していくのかという事が細かく実験を通して書かれていて興味深かった。

だが、挙げられていた人物が普通の女性とは少し違う「極端な」例だったため、一般的な女性の例を見たいと思った。「私遊び」は程度の差の違いはあれど、誰もがやっていることだと思う。普段見につけないようなヘアアクセサリを身に付けただけで「いつもと違う私」へと変わることが出来る。「私遊び」を行っているかどうかは目に見える境界線で区切ることの出来るものではないと私は思う。例えばカジュアルな服の人とお姉さん系の服の人がお互いのファッションを交換するなど、「すぐ近くにいる誰かになる」実験も入っていれば尚良かったと思う。

ファッション以外で自己表現を行い、自己実現を図っている女性もいるのではないかと思う。例えば、スポーツ選手など。「私遊び」をするのは「なりたい自分」をイメージしそれに近づくことで「新しい素敵な自分」を手に入れることであると筆者の論文から私はそう理解した。ファッション以外の形で自己表現・自己実現を手に入れている女性への調査や実験を見てみたかったと思う。また逆にファッションに全く興味が無い女性へのインタビューもあれば面白かったのではないか。過度に「私遊び」を繰り返すタイプと、全く興味の無いタイプの比較、対談が見てみたい。私は現代では過度な「私遊

び」も存在すると思う。そして場合によってそれは度が過ぎた行為だと私は思う。ピアスは体に穴を開ける行為であるし、筆者も述べていたように髪を染めることも痛めつける行為である。それを迫る現代社会の背景にこそ私は問題を感じた。なぜそこまで「私遊び」をしてしまうのか。そういった観点も必要ではないかと思う。(新口)

非常によくまとまった文章構成で(上目線ですいません;)、吸い込まれるようにノンストップで最後まで読みました。個人的には、4章の実験が興味深い内容でとてもおもしろかったです。

実際、批評するような部分がありませんが、唯一気になったのが2章です。2-5・2-6では、周囲から得られた評価によってのさまざまな行動や対処方法という、私にも想像しやすい事象について論じていますが、それ以前で述べられている「ならい」「やつし」などへの説明はやや理解しにくかったです。聞きなれない単語が繰り返し使用されている上に、「片道のやつし」といったような派生語的なものまで登場してきたので、少し混乱しました。図を用いてよりわかりやすく説明するか、もしくはもう少し量を減らしてすっきりさせても良かったかなと感じました。(市口)

ファッションはしばしば自己表現や自己演出としてとらえられる。それは自己と他者を別のものととらえる近代的な思考の副産物だといえる。著者は日本で生まれた風流への美意識に関する文献を読み解きながら、「こらし」「はずし」、あるいは「みたて」「やつし」、さらには「ためし」「さらし」などの、自他の視線を巧みに超える、いわば「遊び」の観点からファッションをとらえかえそうと試みている。そこが読んでいて面白かった。ただし、それを「私遊び実験」に実際に活かすためには、概念の整理と方法へのもう一工夫がほしかった。そこが惜しまれる。(鶴飼)

## 市口未来

「現代社会における香り文化 ―香りが社会にもたらす影響とは―」

キーワード：香り、嗅覚、香水、香害、香りマーケティング

これまで、「香り」という存在が多方面から注目されたことがあっただろうか。ファッションのツールとしての香水や整髪剤などは、数え切れないほど多くの種類がすでに市場に出回っているが、せいぜいその程度である。ところが、近年の社会においては、

香りがあらゆる方面からスポットライトを浴び、なおかつ、あらゆる事象に影響を与えている。まず、香りが人々の心・身体ともに癒しを与える。そうすることによって、香り製品の市場が活発化する。そして、香りが人々の心理にはたらきかけることを知ったマーケターが、消費者の購買意欲を高めようと広告のために香りを起用する。そうすることによって、香り製品以外の市場までもが潤ってくる。このように、香りが人だけでなくさまざまなもののために利用され、プラスの影響を与える時代が到来している。そもそも、人々はなぜ香りを求めるのか。香りによってどのような身体的・精神的変化が起きるのか。いくつかの研究事例を分析しながら、香りが今どれだけ必要とされているか、さらには、香りが今後どのような存在に成長していくのか、現代と昔の香り文化の違いを比較しながら考察していく。

#### <市口論文への批評>

「香り」という、ファッションの中でも目に見えない難しいテーマだと感じたが、「香り」が人に与える影響について人と「香り」の歴史とともに、また様々な実体験を交えて記述されているので流れに沿って読みやすかったと思います。香り刺激→有機体→行動という連鎖過程について、購買意欲という点からの考察が目に見えないもののパワーを説明するにおいて非常に説得力がありました。全体としては香りについての説明が多い印象で、もう少し論の展開にメリハリがないように感じました。論文で提示している香りの文化や影響もっと関連させて、香りが今後どのような存在に成長していくのか一歩踏み込んだ市口さんの問題提起や検証を読みたいです。香りとは人の心にとって余裕を与えるものでありながら、心に余裕がないとその影響を有効活用できていない…(?)。今の世の中の問題に対する香りの力に期待したくなりました。(後藤)

香りについての論文だが、筆者がこの論文を書くにあたりどのような経過で、香りに興味を持ったのかがわかりやすかった。香りの種類についても丁寧に書かれており、臭覚についての詳細も説明されているので、流れはとても理解しやすいが、はじめにおおまかな定義づけをしてもいいのではないかと考えた。また個人的には、香りがもたらす「落ちこぼれ恐怖症」というような現代病をはじめ聞いたので、その現状や症状にも少しふれてもいいのではないかとということや、何故香りが注目されている現代社会で、華道・茶道に並び「香道」はあまり発達しなかったのかということについて取り上げてもいいのではと思った。しかし、現代社会との時代背景や現状も香りという側面から丁寧に分析されており、過去の事例や実験についても非常によく調べられていた上で、わ

かりやすい身近な具体例があげられているので読みやすかった。その上で私なら、身近な環境で香りに関する簡単な実験（例、気分や性別、年によって好むにおいが変わるのかなど）を自ら行ったかもしれない。（黒岡）

香水、においに特化した論文という切り口はとても面白かった。社会学の論文にしても、めずらしいのではないか？香水やにおいでどんな論が展開できるのか期待しながら読み進めていくことができた。香水の過去と現代の扱われ方の違いや消費マーケットだけではなく、人間の嗅覚に関する内容も載せていてくれたので、香水が私たちに与える効果が把握しやすかった。「香害」というにおいが私たちに与える癒しの効果とは正反対のパラドックスの内容も面白かった。しかし、「パラドックスが存在する」という事実だけで、対策や解決案が記されてなかったのが少し残念であった。世間の香水からアロマセラピーへと流行の変化を追って記載されていて、私自信も昔ほど、香水に気を使わなくなり、アロマオイルを集める傾向にあるなあと納得させられた。時代は相手に配慮する（他人によく思われるための）香水から、自分自身を癒すアロマに移行しているのだろうか？全体として読みやすく、私たちの年代に実に興味深い論文だった。私個人的に香水のマーケティングにおいてメディアや紙面で表現することのできない「におい」をどのように売り込んでいるかなどが知ればと思った。（森）

見たり聞いたり文化や流行には、関心のない人を素通りさせてくれる余地があるけれども、香りや臭いに関しては、それが許されない。香りや臭いは、人間のより本能的なところを刺激しているようだ。この論文を読んで、若い人たちが、幼少時からいわば香りのマーケティングにさらされていることがわかった。（特に若い）人は自分の香りや臭いを正確に確認できない一方で、他人の香りや臭いには敏感である。それは、著者が述べているように自分を「癒す」効果をもつが、他者への暴力性もともなう。その社会的意味について、もう一步踏み込んでほしかった。（鶴飼）

## 池田利奈

「大切な「友だち」 ―各世代における友人関係―

キーワード：他人指向型、友人関係、傷つきたくない

社会で生きていく上で、誰かとの係わり合いは必要不可欠であり、皆それぞれ何らか



のつながりで「友人」を持っている。そこで、これから先自分が歩む可能性のある未来、また各世代(各時期)において「友人」とはどのような存在であるのかを研究した。

近年が、D・リースマンのいう、同調性が外部の他者たちの期待と好みに敏感である傾向により保証される他人指向型の人間関係が築かれているとすると、「友人」は大切な存在ではある反面、気を遣い合い時には疲れる存在になっていると思われる。それは現在学生期にあたる人々の間にもみられ、彼らはいま非常に慎重に人間関係を営んでいる。学生期以降においても、付き合い方や付き合う友人に変化はあるもののそれぞれ重要な存在であることには変わりがないが、他人志向型のこの社会で、かつてよりも息苦しい友人関係を築いているのではないだろうか。

しかし、生きていく上で、やはり「友人」は欠くことのできない大切な存在である。

#### <池田論文への批評>

今記憶している限りではあるが、私自身これまで友人関係に疲れたということがなかったため、こうした友人関係を「疲れる」「しんどい」という切り口から見た論文が新鮮に感じられた。それと同時に、これから社会人生活という人生の大部分を残している今の私にとって、気疲れなどの危険性を示唆してくれる論文であった。また細かい点であるが、「友人」、「仲間」という二つの言葉をこれまで同じものとして考えてきたが、それぞれが違った意味合いをもつ言葉であるということがわかった。この論文において、現代の友人関係にて求められているものは「量」より「質」となっていたが、確かにそれは私自身うなずけるかもしれない。やはり現在の友人関係が親密化しているという傾向は否めないかもしれない。また4章での社会人へのインタビューを男女それぞれにすることで、3章における男女間の友情を裏付けることができおり、読み手にとっても理解しやすかった。最後に、各章の文末にそれぞれ友人の大切さを記述していることから、著者にとっての友人の大きさを感じることができた。(宇多川)

「友人が大切かどうか」「友人の位置づけ」を数字化したデータから読み取るのは沢山のデータ収集が必要であつたらうと思うし、数字化されたグラフが論文を説得力のあるものにしていく。ただ、どの章でも結論が一貫して「やはり友人は欠かせない存在である」というものだった。一貫性があり、読みやすかったが、起承転結の転の部分弱かったのではないかと感じる。違う角度からの考察や、男性の人間関係に触れてみる必要があつたのではないかと感じる。各世代別で検証されていたが、女性について書かれている割合が高いと感じた。筆者も述べている通り、男性と女性では友人関係のあり方も違う

と思われる。もう少し男性女性均等に触れてくる必要があったのではないか。

友人関係がかつてより慎重かつ気を遣い合うものになったと筆者は述べている。これは他人方志向の社会が形成されたため、そして Mixi などのツールにより友人と過ごす時間が長いという、親密であることを強要される社会になったためと筆者は述べている。これは段々と社会がそう変遷してきたものと筆者は述べていた。では、そうではない時代背景の中で友人関係を形成してきた人々はどのように人間関係を築いて来たのだろうか。筆者は大学を卒業して就職した社会人一年生や二年生にインタビューを行っていたが、もっと上の世代の「友人関係」に対する考えも聞いてみたいと思った。過度に親密に繋がるツールの無かった時代に友人関係を気付いてきた人は、今の現代の私たちの少し臆病とも取れる人間関係の構築の仕方をどう見ているのか。そういった観点から現代の気を遣い合う友人関係を見つめなおす視点があっても良かったのではないかと感じた。

ママ友の例は実際の書き込みを引用していてリアリティがあり、彼女達が本当に悩んでいるということが分かった。ママ友以外の「友人関係は大切だが慎重になってしまう」人達の実例の例も引用してみてもどうだろうかと思った。例えば友人関係に悩む小中高生の書き込みや、学校裏サイトによるいじめなど、便利になったツールによって近づき過ぎた距離によって悩んでいるといった事は頻繁に耳にする。そういった実際の例を持ってきて、「現在の間人間関係が気を遣う、また Teen Eiger などの若い層でも複雑な人間関係の中で生きている」事を示した上で、「それでも友人関係は大切なものだ」と主張する筆者を裏付けるデータを持ってきたほうがより説得力があり、『大切な「友だち」』というタイトルに結び着くのではないかと考えた。筆者の付けた大切な「友だち」というタイトルを見たときに、「大切だけれども面倒なもの」といった印象を受けた。それでも「大切な」友人関係を示すデータやインタビューを掲載していればより良かったと思う。(新口)

池田さんの論文は、各時期において、たくさんのデータやアンケートなどによって、さまざまな視点から友人関係を考察していただけたと思います。そして何より考えさせられる論文だったと思いました。どの時期においても、友達との関係を築き、そして継続させていくために大なり小なり気を遣っていて、そこにそれぞれのプライドや価値観までもが加わって、なんだか人間関係とは難しくてしんどいものに思えました。なのに、それでも友達を作ったりコミュニティに入っていく。自分の居場所を求めてやまない。人間の複雑さやおもしろさを感じました。これからも他人指向型の社会が続いてい

く中で、どうすればストレスを感じずに友人関係を良好に築いていくことができるのか。それがこれからの私たちの課題になっていくのかなと思いました。その展望があれば、またおもしろい論文になるかもしれないと思いました。(我孫子)

KY (空気が読めない) という流行語は、この学年の人たちが女子高生だった時にこの人たちから流行りだしたそう。つまり「空気が読めあえる」のが「友だち」だということになる。これは、読んでいる空気は多少違って、友だちは友だちだと信じてきた評者 (50 代男性) の体験と大きく異なっている。ここまで友だちを大切だと感じる半面、親やきょうだいとの関係、職場の上司や同僚との関係、家庭内でのパートナーとの関係などは、どうなっているのか、友だち以外の関係と比較しながら考察を深めたら、さらに良い論文になったのではないかと思う。(鶴飼)

## 河合俊典

「海外映画のなかの日本像 ―ハリウッド映画を中心とした考察―」

キーワード：映画、日本、イメージ

海外の映画作品を見ていると、必要以上に身体的特徴が誇張されていたり、不自然なところに日本の物が配置されていたりとしばしば日本人が持っている日本のイメージとかけ離れた、違和感のある日本像に出会うことがある。どうしてこのような表現がなされるのだろうか。いくつかの作品を制作国と制作年代で分類し特徴や変化を比較していくと、違和感のある日本像は単純な誤解やステレオタイプに基づいて作られているのではなく、その登場する作品の制作された当時の制作技術・歴史や社会の状況・製作者の意図に影響を受けて、設定を分かりやすく視聴者に伝える説明的機能と、多少間違いがあるとなりに関わらずその日本像を見たいという消費的機能の 2 つが組み合わさって作られているように見える。しかし、日本と制作国の関係が険悪となっていると思われる時期には、ある種の意図を持っていると思われる像が多用される傾向があり、注意が必要である。ということを本稿では考察している。

### 〈河合論文への批評〉

海外のハリウッド映画での日本像についての論文で、日本に関する事象により敏感に注目し、様々な共通点や違和感を自分なりに抽出し、分析している点は素晴らしいと感

じた。ただ、筆者自体この様な膨大な量のハリウッド映画に対して、どのような経緯で興味をもち、論文を書き進めたのかという背景について、もう少し知りたい。また調査対象や調査方法を明確にして記述している点や、自分なりの研究を時代別に国別に研究している点など、軸を通しながら進められた事が何え、それぞれの特色や共通項が非常に理解しやすい。その上で、最終的に映画に出てくる日本像が持つ意味を考えながら見る姿勢について考えるだけでなく、終盤で書かれている過去の映画から分析した「日本像の機能」が今後の日本に対して、世界に対して、映画社会に対してどの様に機能していくのか、また何らかにその機能性を利用できないかなど、未来の展望についてを考えるとみてもおもしろいのではないかと思う。(黒岡)

沢山の映像資料に基づいた考察で、これだけの映像資料を見ることは大変な労力であったのではないかと思うので、その努力は素晴らしいと思う。また、論文中で使われている言葉も筆者なりの説明がついていて読みやすく、面白かった。また、映像資料を写真として貼り付けるなど分かりやすく伝えるための工夫がなされていた。ただその割りに結論が「映画を楽しむ」というものであったのには少し物足りない感じがした。映画が映像と音だけで物語を伝える役目を担っている以上、出てくる映像に「説明的な」機能がついているのは当たり前のことであるが、「消費的な」機能：つまり視聴者の見たい！という欲求に応える形で映像に反映されていく日本像というのは興味深かった。ただ、その部分についての考察はかなり短く、文献からの引用など多数の意見があればよかったのではないかと思う。

1980年代以前の映画のアメリカ映画への考察について。戦中の敵国であった日本に対してもっとアメリカ国民の気持ちを煽るものがあっても不思議ではないと思う。日本でも映画だけではなく、教科書、詩、歌にも鬼畜米英の精神が練りこまれたものが多数存在した。もちろん今は入手(どこかの本屋で売っていたり)することは出来ないが、資料としては残っているはずである。筆者の入手したものが日本にとって好意的過ぎる作品ばかりだったのではないか。戦争が終わってもその記憶は根強く残っていたはずであるし、その弊害は映画にも反映されているはずである。娯楽が今ほど多くなかった時代に映画は国民に訴えかける最も効率のいい手段として使われていたと聞く。(ナチス・ヒトラーのように) 探せばもっと作品は見つかったのではないかと思われるので、筆者の選択した作品に疑問を感じる。

調査方法について。筆者がどの映画を選択し、記述するかによって読み手に与える印象を大きく左右してしまう占める割合がものすごく高い。私の抱いていた海外映画にお

ける日本人の取り上げられ方と違う部分も多く、(私はもっと悪意をこめて描かれているものだと思っていた)もう少し説得力がほしかった。とはいっても映画となると膨大な数があると思われるので全てを見て検証するという事は不可能だ。すると、やはり調査方法には問題を感じざるを得ない。この調査方法ではやはり客観性、公平性の面で問題が出てくるのではないか。特に筆者の研究対象が映画である以上、曖昧さを払拭することが必要ではないか。先ほど述べたように、戦中、戦後の映画のチョイスに疑問を感じた。筆者は日本にとって好意的な映像を入手しがちな傾向にあるのではないか。文献などからもっと確かな証拠を引っ張ってくるなどしないと、裏づけや説得力にかける点が調査方法から見られたのが残念であった。(新口)

昨年の7月、私は友人と2人でニューヨークへ行った際、この論文がスポットを当てている“日本人のイメージ”について現地の若い男性と話したことを思い出した。私たちはその男性に「日本人か？」と尋ねられ「YES」と答えると「やっぱり」と言った。彼曰く日本人の女の子は全身をMARC JACOBSで着飾っているのだという。私たちはそれぞれが同ブランドのカバンと時計を身に着けていたため、間違いなく日本人だと思っただけらしい。もちろん日本人女性がみなMARC JACOBSのものを所持しているわけでも、まして好きなわけでもないことは明らかである。

このような経験も踏まえ、ステレオタイプというよりも、彼らの抱くイメージが100%の間違いでないことが、論文を読んでも感じた「へんてこな日本像」を増長させているのだと思った。仕事帰りに提灯が吊ってある屋台に行くこともあるし、扇を飾った家も多くある。間違いではないのだけれども、イコールにされてしまうと違和感や、少しバカにされたような気持ちさえ抱く。なぜ私がそう感じるのか、ということを考えると、他のアジアの国々よりも日本がとても先進的であって、オシャレであると思っているからではないかと考えた。しかしこれもまた勝手な想像やイメージであることから、イメージについて考察することの難しさを感じた。(三崎)

海外映画に描かれた日本人のイメージを分析するというのは、ありふれた着想である。しかし、この研究が、主観的な判断を差しはさまず、ポピュラーな39作品をひたすら観て「日本的」要素をピックアップしていくという、真っ正直な方法によって貫かれている点に好感を持った。結果として、政治的・社会的な影響もあるものの、むしろそのような文脈から少し離れた、純粹に記号としての日本イメージが映画の中に多くあることを発見している。日本でつくられる映像にも、根拠のないアメリカや中国のイメージ

があふれていることを示せば、さらに良かったと思う。(鶉飼)

## 久我奈緒子

「近江八幡市のまちづくりとボランティア

—ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展 in 近江八幡を通して」

キーワード：まちづくり、ボランティア、協働、近江八幡

和と洋が調和し合う美しい街並みが見られる近江八幡。今日までその美しい姿が残されている理由は、これらを後世に保存し受け継いでいこうと行政と市民が協働しまちづくりをしているからである。近江八幡市は積極的にまちづくりが行なわれている街で、2009年10月3日～同年11月3日まで開催された、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展はまさに、市民による手づくりの展覧会であり、行政の条例の好事例となるイベントであった。前半（第1章～第3章）では、近江八幡の観光への取り組み、まちづくりや風景についての条例を通して、まちづくりやボランティアをするとき「協働」が大切であることを述べ、後半（第4章～第6章）では、事例として「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展」を取り上げ、ボランティア活動がどのように行なわれているかを述べた。「我がまちが好き」と「自分の興味のあること」を皆で力を合わせ、一生懸命やったことが結果的に「まちづくりボランティア」となり、ヴォーリズ展が成功へと導かれ、次世代へのまちづくりに繋がるのが真の成功であることが、私の結論である。

### 〈久我論文への批評〉

久我さんの論文は、おもしろさがたくさん詰まった論文だと思いました。そう感じたのは、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展でボランティアをすることによって、久我さん自身が体験したこと、感じたこと、学んだこと、考えたことでこの論文が書かれているからだと思います。さまざまな文献を読み、それらから得られるものよりも、自ら体験したことで感じ取ったものは絶対に間違いのないものだからです。そんな中で、人と人とのつながりや協働が、どれだけ1人の人間の活力となり成長させることができるのか、どれだけ素晴らしく感動することができるものなのか、そしてどれだけ大きな力に変わるのかということを実証できたことに、この論文の良さをとても感じました。人と人との関わりあうことに、現在はストレスなどさまざまな問題が注目されがちですが、支えあうことの重要性を再認識できた論文だと思いました。(我孫子)

近江八幡のまちづくりやその為のボランティア活動について、自ら参加してフィールドワーク調査をするなど、とてもリアルに書かれている論文だと思いました。私自身、隣の京都府に住んでいながら、近江八幡市が「まちづくり基本条例」・「風景作り条例」などを作るくらい本格的なまちづくりに取り組んでいることを知りませんでした。私のように、古い町並みなどが残る土地に興味はあるが、近江八幡市のことを知らない学生もたくさんいると思うので、ぜひ何か催し物をするときは大学などの学校にも宣伝をしていただけると嬉しいなと思いました。また、論文内容についてですが、まちづくりやボランティアにおいて人と人とのつながりの大切さが大事であるとありますが、まちづくりを本格的に行うようになってから、実際に近江八幡に住んでいる人々やボランティアに参加した人々など、地域の人々の関係性が以前と比べてどのように変わったのか、もう少し詳しく知りたいなと思いました。(池田)

この論文を読んで、近江八幡市に大変興味もちました。また実際に足を運んでみたいと感じました。それを一番感じたのは、久我さん自身がウィリアム・メレルヴォーリズ展にボランティアスタッフとして参加し、参与観察を行った場面です。近江八幡市が目指す「協働」を中心としたまちづくりの成果は、久我さんが実際にこのボランティアを体験し、やりがいや新しい価値観、新しい人間関係を獲得していく様子にもよく現れていると思いました。この体験のように、市民一人一人が自分のまちを愛し、文化を育てていくことが暮らしにとっても観光にとっても大事なんですね。そんな魅力あふれるまちには是非一度行ってみたいですね。

参与観察の日々の記録や、実行委員会の主要メンバーへの聞き取り調査の記述の中の久我さん自身の気付きや真剣な思いは、この論文を読むぼくにとって新鮮なものとしてうつりました。実際に本気で取り組んでこそ見えてくるものもあるということにも気付かされました。(岡本)

著者に教わって評者も昨秋、ヴォーリズ展が開かれている近江八幡市に行ってみた。近年、琵琶湖東岸の各都市で、自然と歴史を活かした観光が活発化しており、近江八幡もそのひとつである。たしかにボランティアの案内を受けながら、古い街並みに溶け込んだヴォーリズの建築群をひとつひとつ見学して回るというユニークな展覧会で、主催する住民の高い意識を感じた。本論文の後半でも、ボランティアの実態やインタビュー

記録が収録されていて、読み応えがあった。ただ、前半のまちづくり条例の解説は、やや公式的すぎて、もう少し独自取材の裏付けがほしい。(鵜飼)

## 黒岡真衣

「化粧から見る現代と女性 ―なぜそこまで美しさを追い求めるのか―」

キーワード：化粧、美しさ、現代の日本女性、  
モテ・見た目重視社会、自己表現

今という時代と、そこに生きる日本女性の特色を「化粧」という切り口から考察する。なぜなら色々ある事象の中でも、現代に生きる女性のほとんどが「美しくなること」に興味を持ち、美の追求にいそしんでいる風潮が強いので、その側面を顕著に表しているのではないかと思ったからだ。不景気に陥ったのにもかかわらず、確実に美容というものは進化しつづけ、例えば食をけずっても美容に投資する女性達は私の周りにも多く見受けられる。私たちは一体化粧に何を期待しているのか。ただモテたいだけなのであろうか。そしてそれは今後どう展開していくのだろうか。様々な疑問が頭をよぎる中、私も現代を生きる女性の一人として、「化粧」と「時代」と「女性」がどのようにリンクしているのかを調べた。またこの題材に焦点をあてるきっかけになった一つに、女性誌や周りの同年代の会話の中で「モテ社会」や「美しさを重視する見た目社会」という言葉が以前より取り上げられている事実がある。よって論文の進め方としては、美しさの正体にせまり、化粧の意味を考え、化粧が生まれた歴史と各国の化粧の発達事情を考察した上で、日本における化粧の意味や移り変わりと比較し、現代日本の女性が美しくなることで何を求めているかを探る。

### 〈黒岡論文への批評〉

私がこの論文で特に興味深かったのが、「不況が世の女性をたくましく美しくしていく」という彼女なりの結論の部分である。確かに化粧をすることがあくまでもみだしなみの一つであった時代は、化粧は自分のためではなく、男性のため、ひいては世間のためだったのかもしれない。それに比べると現代は、男性に媚びた化粧というよりは自分を満足させるための化粧なのかもしれない。ただ、それは不況が影響しているのだろうか。不況というよりも、女性の解放により、女性自身が自らの意思で選択を行うことの出来る幅が広がっていった影響ではないだろうか。その中で、その時代ごとに流行が



表れていくのだと思う。それが、アムラーであったり、えびちゃんであったりである。現に、この不況の中で、世の女性はたくましくなっているだろうか。婚活がブームになるほど、結婚による生まれ変わりを夢見る女性は本当に多い。その生まれ変わりはあくまでも男性に依存したものである。(大野)

「美しさ」を題材にする論文は世間には多いのではないのだろうか？しかし、黒岡さん独自の切り口で論を展開していて読者を引き込む内容だったのではないかと思う。「顔の幅は耳から目じり、目の横幅、目と目の感覚がおのおの等しく五分。額の生え際から眉毛、眉毛から鼻の先端、鼻の先端から顎先までが三分」というゴールデンマスクを持った人間が世間的に美しいといわれる、という時代や好みと一切関係のない美の捉え方に驚いた。美しいと思う感情は個人それぞれの感じ方であると思っていたからだ。しかし、このゴールデンマスクを所持している人間は生殖力が高く、周りから惹かれることが多いようなので、私たちはこのような人間に気に入ってもらうためや、自分のアイデンティティーを示すために化粧をする、という考えは納得する内容であった。

化粧が古代から存在していること、しかし目的が現代とは全く異なり、伝統的な化粧意識が崩壊されたという論の部分で、各時代や各国の化粧意識の調査は細かくて感心した。結局、現代の私たちの化粧の意味は自らを表現するツールであるが、遠い目的として子孫を残すための本能であった。すごく面白い論であったし、納得できる内容ばかりだ。(森)

化粧や美しさに対する知識や情熱に全く欠ける者としての立場で考察します。この立場に自分の経験も交えて考えると、化粧とは自己表現よりもやはり女性は化粧をするもの・したほうがいいという社会の規範によって行われている比重が大きいと思われます。

例えば、教職ゼミで遅刻してスッピンできた人は、先生がそのまま可愛いといても講義中に化粧していました。化粧してない顔より化粧している過程の方が結構えげつないのにそこは見られても構わないんだという印象を受けます。

また、化粧というのは何らかの行為を施すという点で、努力することができるということも動機として重要だと思います。例えば一般の中年女性がスッピンで、自然な老いと美しさを追求しているといっても誰も評価しないと思うのですが、顔を真っ白に塗りたくった大物女性タレントは若いと評価されます。

なので、まず自己表現以前にまず女性にとっては化粧すること自体に社会的意義があり、その上で、自分の努力を評価して欲しいという願望が化粧には現れていると思いま

した。(河合)

評者(50代男性)は、大学4年生の時、同級生の女性向けに化粧品メーカーによるメイクの講習会が開かれたことを憶えている。一般にも、普段はお化粧しない女子学生の方が多かったように思う。いまのゼミ生に聞けば、中高生時代からメイクをしていたという人が多い。「美しさ」への意識は大きく変わった。著者は、美しさは性的魅力であり、高い生殖力を意味する、化粧するのもその域に近づくためだという。男に媚びないというよりは、たくましく自分をアピールするための化粧という主張には整理が必要だが、いまの女性がおかれた切実な社会背景を感じた。(鶴飼)

### 松崎みなみ

「なぜ、今ヨガがブームなのか? —ストレス解消としてのヨガ—」

キーワード: ヨガ、健康、ストレス社会

今、ヨガがあらゆる雑誌やテレビにとりあげられ、大ブームとなっている。全国のヨガ教室には、性別や年齢に関係なく子供から大人まで多くの人がヨガ教室に通っている。筆者も、そんなヨガ教室に通う1人である。

そこで、本論文では「今なぜ、こんなにもヨガが注目されているのか」ということをテーマに、ヨガインストラクターや、ヨガ教室に通う人の声を参考にヨガと現代社会の関係についてを説明している。また、実際に筆者がヨガを体験してから、どのような変化があったのかということも述べた。

第1章では、ヨガ教室に通う人達がヨガを始めたきっかけから、なぜ、今ヨガが注目されているのかという仮定をたてた。第2章ではヨガとは何かについて、ヨガがもたらすものについてを説明し、第3章では現代社会の特徴とヨガの関係についてを第4章ではストレス社会に焦点をあてヨガインストラクターによる実験をもとにストレス解消方法としてヨガが注目されている理由を述べた。

#### <松崎論文への批評>

松崎さんの論文は、まずとても分かりやすいと思いました。『なぜ、今ヨガがブームなのか?』ということに対して、仮説・証明・自分の考えが順序立てて書かれているところ。それから、それぞれの章や節がコンパクトにまとめられているところ。説明や事

例の部分などは、表や箇条書きにしたりと書き方の形態に工夫がされているところなど、読みやすく感じました。また、自分の経験や事例、アンケートがたくさん書かれているところも、ヨガが現代のストレス社会において、実は重要であることが理解しやすかったです。ただ、松崎さん自身がヨガ教室に通っていたということだったので、自分自身の変化や同じ教室の生徒さんに密着して事例をあげるという形ができれば、もっとオリジナリティが高くなるのかなとも思いました。

薬など科学技術が進んでいる中で、根本的な自然治癒力を高めることに注目したところが、今の社会に対しておもしろい論文だったと感じました。(我孫子)

この論文を読んで一番興味深かった部分は第3章2節の「マスコミと憧れによるヨガ」というところでした。メディアが生み出す美への意識というのは、女優やモデルへの憧れだけからくるものではなく、ファッション雑誌等の低年齢化による身近な同年代女性への対抗意識の増加も1つの要因であるという論点が非常におもしろかったです。憧れの女性に近付くために、ファッションやメイクといった外見をかざる努力だけではなく、ヨガといった健康法まで手を出さないといけない。若い女性の方々は本当に大変なんだなと感じてしまいました。

気になった点は「ブーム」としてヨガを捉えるのであれば、それまで興味がなかった人が何故ヨガを始めるかということについてもう少し詳しく知りたかったです。先ほどのメディアと美意識の考察はユニークでおもしろかったので、健康意識を満たすためやストレスの解消手段とするために何故他の健康法でなくヨガに注目があつまるのか。個人的にはその辺りの詳しい論述がもう少し欲しかったです。

ヨガのしくみや効能についてはよく調べられていて良かったと思います。第4章に報告されているいくつかの事例のように、ストレス解消や体や心の健康といったことにごく効果的なものなのだと伝わってきました。(岡本)

具体例がふんだんに使用されていて、非常に読みやすくてスーッと頭に入ってきました。ただ、個人的に気になったところがいくつかあります。

まず、「2-3. ヨガがもたらすもの」の9つの項目の構成ですが、①には具体例が説明のあとにしっかりと書かれているのに対し、②～⑨に関しては効能の説明が簡潔に書かれているだけです。もう少し詳しく知りたかったので、①の説明の半分ほどの長さのものを全項目に付けてほしかったです。そうすると、より一層理解が深まるかなと感じました。また、2-4. の中の<チャクラ>の部分が少し専門的すぎて分かりづらか

った気がします。比較的スピリチュアル的なものだと思うので、説明するのは難しいかもしれませんが、図などのイメージが膨らむようなものがあればより良かったと思います。あと、かなり細かい指摘になるのですが、ところどころに誤字・脱字が見られたことも気になりました。(市口)

卒論完成のためにはギリギリの時点まで、テーマを何にするか著者は迷っていた。最終的にヨガにしたと聞いて考えさせられた。以前ならメディア系や記号系のテーマが多かったが、最近では直接的な身体系のものが増えてきている。学生の間にも、目新しい話よりも原点回帰的な志向が見て取れる。ただ、著者の場合も「ヨガをしていると美しくなれる」とイメージ先行で始めて、内面の調和から外面を美しくし、あるいは対人関係を良くするという理解にいたっている。しかし、そんなに内面と外面や社会はつながっているのか、もう少し懐疑的になってもいいはずだ。(鶴飼)

### 三崎友香里

「流行現象について ―「女子」が追い続けるものとは―

キーワード：流行、メディア、社会心理、女子、大学生

私が選んだ卒業論文のテーマは「流行」である。流行に関して「誰が流行をつくっているのか」や「なぜ若者は流行が好きなのか」など様々な疑問を抱いているということからこのテーマを選択した。流行がどのように発生し、広がっていくのかというような、流行という現象そのものについて女子大学生を対象にしたアンケートや文献などを用いて論述する。流行を調べるにあたり私自身が流行していると感じているキーワードである「女子力」について考察している。女子大生は女子力というキーワードをどこで知り、誰に伝えているのか、メディアはキーワードの解釈や拡大にどのように影響を与えているのか、そしてその流行が小流行から大流行に至るまでのプロセスの中でメディアの役割や関わり方に着目し展開していく。

#### 〈三崎論文への批評〉

「流行」というテーマから「女子力」への流れは少し強引さと違和感を抱いていましたが読み進めていくと「レギンス」や「森ガール」などうまく絡めてうまくまとまっています、女子の流行の広告の役割についてジョシ視点だから書けるおもしろい論文だな

と思いました。

「女子力とメディアの関係」を男性的な要素をもった女性主人公によって、女性らしい高い女子力を持った女性の希少さを表しているのではないかと記述されていましたが、私はドラマから主人公とは対照的に描かれる（ライバル的存在として登場する）昔ながらの女性らしい女性との対比によって、逆に少数の強くたくましい女性が目新しく感じたので「高い女子力」という指標に対する周囲からの評価が変化読み取れるのではないかと考えました。流行におけるメディアの役割と今後についてアンケートでもっと詳細なメディアと絡めた結果も見てみたいと思いました。（後藤）

私がこの論文を読んでみて感じたことは、まず、構成がしっかりとしているということである。1章では「流行」についての先行研究について述べてあったり、研究対象の限定や、キーワードの設定がされていたりと、議論を進めるにあたっての方向性が明白になっている。それだけに読みやすい。実際に調査を行うということで、その場合も仮説を立てた上でアンケートを実施している。仮説を立てていることで、アンケートを行う対象をなぜ女子高校生、女子大学生、30～40代の女性に設定したのか、なぜそれらの質問項目を設定したのかという点において説得力があると感じた。

特に私が感心したのが、「女子力」という言葉自体が曖昧で、流行がいつからなのかわかりにくいものに対して、女子力に関するサイトの開設日や、CM等で彼女なりに特定をきちんとしていることである。また、テレビドラマというツールを用いて分析を行う方法も、視聴率やストーリー、主人公の設定というはっきりしたものがあるだけイメージしやすくなると思った。（大野）

流行に興味が無い、というより完全に置いていかれている者の立場から考察します。そこで考えていくと、「女子力」の流行と「森ガール」の流行は、メディアは違っているが流行発生のメカニズムとしては同じようなものではないだろうかと思いました。前者はテレビドラマの傾向に漠然と現れているような意識、そこから視聴者が受ける印象が、ネットや雑誌などのメディアで名前を与えられて、そこから口コミなどで広がっていった形、後者もまた、ネット上で名前をつけられたことで人が集まり流行となった形です。

そう観ると、雰囲気は全く異なりますが妖怪とか都市伝説が同じような形で生じているということが出来ます。様々な個別の事象が、名前を与えられることで、特徴を取捨選択しながら一般化されていく。そうしてできた概念は曖昧だけれども多くの人の感性

に引っかかり、より拡大していく。もしかしたら、昔から流行の本質というか発生源は名前をつけて分類するところから始まっていて、それをメディアが広げているんだろうなと思いました。(河合)

流行という、ある形をもったものが広まるプロセスの研究が多いが、「女子」という漠然としたイメージの中に、様々な要素がどんどん投げ入れられて、ひとつの流行をつくっていく描写が非常に興味深かった。メディアの影響の大きさは今さら指摘されるまでもなく、ロコミがそれに加勢していることも新しい発見ではない。ただ、「女子力」の中身を問う調査では、「～をきっちりこなす」とか「～ができること」とか「～を磨く」とか、その人の能力や努力を評価するような基準が多くあげられていて、「女子」の世界とは、厳しい競争選別社会なのだと再認識した。(鶴飼)

## 森愛美

「私たちのケータイ力

—素晴らしきコミュニケーションツール・ケータイ！—

キーワード：ケータイ、コミュニケーション、  
パーソナル、『匿名』と『親密』、リテラシー

私たちは現在、コミュニケーションを取る上で欠かせないツールを手に入れている。それは携帯電話である。このケータイを手にした私たちの生活は劇的に変化した。友人や家族、上司や後輩…日々の様々な対人関係をケータイ1つでスムーズにつなげることができる。もはや、ケータイは私たちの生活になくてはならない存在となった。しかし昨今、ケータイを利用した事件やケータイメディアのリテラシーなど、ケータイのネガティブな面がよくニュースなどでとり立たされている。私たちはケータイに踊らされているのだろうか？ケータイは本当に私たちの生活を豊かにしているのだろうか？ケータイは対人コミュニケーションを活発に、そして衰退させる効果があった。そしてケータイを使う危険は様々な方面から忍び寄ってくる。そんな危険を伴ったケータイであっても、私たちは手放すことはできない。ケータイで相手つながることは心の安定もたらしてくれるからだ。だからこそ発展をし続けるケータイを、私たちは使いこなさなくてはならない。ケータイがパーソナルである以上、自覚的な意識で使用しなければならない。ケータイは若者にとって「大人」になっていくよい教材となればよい。そしてケータイ

がりテラシーを理解するきっかけになればと願う。

<森論文への批評>

森さんのケータイの歴史など同世代の私は共感しながら最後まであつという間に読むことができました。アンケートの結果や森さんと同じように我々の世代の多くは早くて中学生の時に携帯を手にし、世間の携帯の普及とともに成長してきたと思う。森さんが第2章で提示したようなケータイのポジションの変化(親のケータイからファッショングッズ→ステイタスとしてのケータイ→高機能で利便性を重視したケータイへ.....)は私の経験としても大変納得でありおもしろかったが、現在小学生や中学生や高校生の成長の中にも存在するものなのかと個人的に興味を持ちました。全体的を通して肯定されている、「つながる」「つながろう」と携帯のコミュニケーション力に対して、個人の「孤独・孤立への恐怖」「引き算の人間関係」や「選択的人間関係」という携帯のネガティブなイメージの方がインパクト強く、それに対抗する記述が弱いと感じてしまったので携帯の「善」の面の記述をもっとたくさん読みたかったです。(後藤)

自分自身では意識していませんでしたが、どうやら私は携帯依存だったようです。この論文を読んで、気づかされました。そして、自分自身では「携帯を使っている」と思っていたのですが、「携帯に操られている」ということに気づきました。本来、人間の便利のために作られたさまざまな機能に、いつの間にか時間を奪われ、逆に「操られている」というような感覚に陥りました。パソコンのインターネットやケータイなどの、情報ツールが発展してきている今日において、私たちはそれにのめりこむことなく、上手く「使う」ということをしていかなければならないのではないかと思いました。本論分においては、ケータイのポジティブな面・ネガティブな面双方が比べられており、改めてケータイの扱い方について考えさせられるものとなりました。また、ケータイの普及による人間関係の変容について、少なからず悪い影響も出ていることから、ケータイを媒介とした人間関係についても考え直すべきなのではと思いました。(池田)

若者は携帯電話のことをケータイと呼ぶ。今では携帯電話と呼ぶ方が不自然になってきた。森さんが指摘するように、携帯電話は単に携帯する電話という概念を超えた、ケータイという総合的なメディアであると思います。

ケータイが生み出す様々な現代的コミュニケーションに関する記述大変おもしろかったです。僕自身のことを言えば、ケータイ的ないつでもつながっていたいというコミ

コミュニケーションは少し暑苦しくて苦手です。そのためどうしてもケータイに関してはネガティブな面が目につきがちです。アドレス帳機能による足し算の関係から引き算の関係へと変質する友達関係などもそのような印象を抱きました。しかし、ケータイによる選択的コミュニケーションも選別の手段ではなく、総数を増やす手段と捉えることもできる。このポジティブな要因もたくさん与えられていることに気付かされました。

また論文を読んで、自分の生活がケータイ抜きでは成り立たなくなっていることを改めて発見しました。現代の生活にはなくてはならないケータイというツールの光と影を見つめ直すいい契機になったと思います。(岡本)

携帯電話が普及しはじめて15年が経過し、ケータイ研究もほぼ出尽くした感がある。本論文はまさに「総集編」で、なるほど著者の世代が中学生の時から使っていた蓄積の厚さにうなづけた。それにしても、ケータイ研究がなぜこれほどまでに人間関係を指向したものになるのか、評者には理解しがたい。ただ、本来は自然消滅するはずの「ジモ友(地元の友達)」や「中友(中学生の時の友達)」が、高校生になってもポケベルやケータイによって維持されるようになったという事例は、ケータイが現代のコミュニティを形成しているようで、大変興味深かった。(鶴飼)

## 新口 絢子

### 「ラベリング論から考える「オタク」の変化」

キーワード：オタク、レッテル、マイナスイメージ、犯罪との関連、  
現代のあらゆる人間関係の市場(友人、恋愛)からの排除

オタクは何故オタクなのか。「お金も時間も割いて何かを熱心に集めている」からだろうか。それとも「バンダナを巻いて紙袋を持ちメガネをかけてアニメ柄のTシャツを着て何だか怪しそうだ」からだろうか。前者の意味合いが薄れラベリングによって認識されるようになったオタク。イメージが大きな意味を持つようになってしまった。80年代後半からオタクは宮崎事件によって危険な存在として遠ざけられていった。現在ではその側面を残しながらより浅く軽く広まった。昨年夏私はコミックマーケット74に行った。50万人の迫力に圧倒されながらも、一人一人と話してみるとごく普通の人達だった。いかにレッテルによって人を判断していたかという事が分かった。しかし人はレッテルによって与えられた役割を演じてしまうことがある。レッテルを貼られること



で起こる世間からの排除が負のスパイラルを生んでしまう。オタクというレッテルが貼られる経緯とその影響、それによって生じる変化を考察した。

#### 〈新口論文への批評〉

近年、話題になった事件などが詳しく取り上げられており、興味深くおもしろい内容でした。

まず気になったところは、ところどころ句点が頻繁につけられており、短い文章ばかりで構成されていたので読みにくかったです。特に、「1. はじめに」の中盤で見られました。また、「2-2. オタクの種類」でさまざまなオタクを紹介する際、オタクの種類が変わるごとに段落を変え、さらに「続いて」などの接続詞でつなぐのではなく、①・②といった数字で分類したほうがすっきりとして見やすいかと思いました。他には、論文中にブログなどからの引用が多数書かれていますが、引用の終わり部分に割注を入れるだけでなく、始まりの部分にも紹介の一言があったほうがわかりやすいと感じました。急にブログ特有の話し言葉での文章が始まり、少し驚いてしまいました（笑）。最後に、全体的に言えることなのですが、段落をもう少し細かく作っても良かったのではないかと思います。何十行も1つの段落のままの部分がいくつかあり、間髪おらずに読むことに少し疲れてしまう部分がありました。（市口）

この論文を読むまで、私は「オタク」という言葉を安易に使いすぎていたのかもしれないと思った。これまで自分のなかでは、単にアニメや漫画、アイドルなどに執拗に没頭している人のことをなんとなく「オタク」と思い込んでしまう傾向にあった。「オタク」という一言にこんなに深い意味があるとは思わなかった。自分自身、これまでスポーツ、音楽など幾つかのことに没頭したことはあるが、自分自身に「オタクかどうか」という疑問を投げかけると、答えは「NO」と言うと思う。もっと言えば、そう言いたい。しかしそれも、世間から敬遠される暗い存在というレッテルが貼られ、そうしたマイナスイメージをもつ固定観念が世間に普及している今だからこそそう思うのかもしれないとも思った。今の若者にとって、一度は耳にし、口にすることはあっても、その実態はどこか得体の知れない「オタク」という概念について、これだけ理解をさせてくれたものは、これまでもこれからもこの論文ぐらいであろうと思う。（宇多川）

社会調査実習の時から、非常に面白い内容でしたが、あれから更に内容が膨らんでいきます、興味深く読むことができました。お疲れ様でした。

最終的に、ラベリング論につなげたのも、とても社会学的な論文になって良かったと思います。具体的なデータや、誰もが知っているようなニュースを取り上げて話しを展開していったことで、分かりやすく、説得力のある良い論文でした。

この論文を読んで人を見た目だけで判断してしまうことの恐ろしさと、少数派の人達に対するラベリングについて考えさせられました。人を見た目で判断してしまったり、逸脱者へのラベリングなど、普段の生活の中で無意識にしていることなのではないかと感じ、私自信、脱レッテルしていかなければならないと感じさせられました。(松崎)

日本のオタク現象には四半世紀を超える歴史があり、いまや一部の先端的な人々のことというよりは、広く風俗の中に埋没している感がある。「オタクはすでに死んでいる」と言われる所以である。しかし、この論文はいわゆる「オタク研究」とはやや異なった視点から書かれている。オタクとは何かとはほとんど無関係に、凶悪犯罪者に「オタク」のラベルが貼られ、逆に「オタク」だから犯罪をおかしたのだと自己循環的に説明されるプロセスが抽出されている。特別な人ではなく、誰でもオタクにされてしまうメディア社会の恐ろしさを、さらに掘り下げてほしい。(鵜飼)

## 岡本直洋

「自由時間とゆたかさの関係 ―労働中心から自由時間中心の生活へ―」

キーワード：自由時間、労働時間、幸福のパラドックス

本稿は、時間の使い方が私たちの生活にどのような影響をあたえているかということに注目している。労働の時間や、各自が自由に使える時間の量が私たちの生活に一体どのような影響を与えるのか。それをどのように使っていくことが私たちの幸せにつながるのかということについて考えていく。

現在の日本をとりまく様々な環境からそれらの答えを探していく。例えば、日本人の労働時間が諸外国に比べても長いことは、これまで色々なところで問題視されてきた。そして、西洋のバカンスやレジャー中心の生活意識に対し、長時間労働に代表される日本人の使い方は、私たちに労働中心の生活意識をもたらした。しかし、幸福のパラドックスという現象や自由時間の意義についての考察から、私たちが幸せに暮らすためには自由時間こそが重要であるということが明らかになった。また、そのために労働中心か

ら自由時間中心の生活にするには労働環境の改善などの様々な政策とともに教育が重要であることもわかった。

#### 〈岡本論文への批評〉

今現在の日本の文化があたりまえであるかのように生きている私にとって、この論文は人間本来の幸せとは何かであるかを考えさせられるものでした。このあいだ、「世界の幸福度ランキング」という記事を目にしました。1位はデンマークで、社会福祉の充実や経済力が要因となっており、一方で日本は43位。やはり私たち日本人は他の国と比べて、全体的に「ゆとり」というものが足りていないのではないかと思います。日本人の、労働に従事しすぎるまじめな性格、古い男女の価値観などがまだ根強く残っていることは仕方ないとは思いますが、幸福度が上位の国の文化や社会形態、生活を参考に、改めて見直してみてもいいのではないかと思います。また、この論文でとりあげられている「休暇」について、私自身も日本人は関心が低いなと思っていました。忙しい毎日の中で忘れがちですが、「労働・お金」と「私生活・自分の時間」、改めて自分にとって本当に大切なものとは何かを考え、自分の人生を見直してみる必要があるのではないのでしょうか。(池田)

グラフやデータに数値化されているものを読み取って、自分なりの結論を導いているところは良いと感じたが、数値ではどうしても読み取れない部分には、一切触れていないのではと疑問に感じた。例えば、「大学生は単位がそろわないうちは授業に出席することに追われかねない (p. 379)」と書かれていたが、卒業単位よりもさらに多くの単位を取得した私は別にそのように感じたことはなかった。それは単位を取るためという目的からではなく学びたいという意欲からのものだったので、自由な時間という数字では少なかったかもしれないが、「ゆとりがない」ということには結びつかなかった。筆者は何事に関しても義務感を持っているようだが、その主観を全体的に入れすぎのように思う。大学生におけるゆとりの調査だとサークル・ゼミなどで十分データが集まるだろうから客観的に考える独自の資料を作ってみたら、人それぞれいろいろな考え方があり、数値ではわからない幅のある論文になるのではないと思う。(久我)

事情があって高卒で不安定な労働条件の下、一人暮らしで働いている友人がいるという立場から考察していきます。すると、私はここで扱われているデータから既婚者、正社員といったある程度安定した生活を実現している人々にとって、自由時間が無いこと

が幸福でないということだというように思いました。

高学歴の人ほど自己啓発によってゆたかさや幸せを実感できるといわれていることも、おそらくその人の家庭は元々親も高い教育をうけていて、高い教育をうけさせることができるほどの安定した生活を実現しているということに起因しているのではないのでしょうか。キャリアアップを考えている正社員ならともかく、地域・企業のセミナーのノウハウがフリーターの不安定な生活を安定させるのに効果的とは思えないし、そういったものでパートタイマーやフリーターを対象としているものは多くないと感じられます。

自由時間の設計を考える前段階として、日々の生活を送るのも大変な状況では、自由時間よりも、むしろ働くという義務的時間があるほうが幸福な場合もあるのではないかと私は思いました。(河合)

日本人は、子どもの時から塾通いで忙しく、大学の授業もやたらと授業コマ数が多く、社会人になっても労働時間がとても長く、自由時間が少ない。だから経済大国といわれる割に幸福感に乏しいのではないかと本論文は主張する。しかし、自由時間を増やして「ゆとり教育」に走った結果が今の学生諸君なのである。「自由時間」とは、自分が自由だと感じる時間であって、勉学の時間であれ仕事の時間であれ、義務感ではなく楽しくやっている時間こそ自由な時間なのである。しかし、自由に時間が使えるようになるためには、かなりの修練を積みねばならないのだ。(鵜飼)

## 大野結香

「日本の未婚化の現状と、これからについて  
—婚活は有効な手段といえるのか—」

キーワード：結婚、未婚化、専業主婦志向、格差、婚活

1980年代後半から表れ始めた日本の未婚化は、今後も着実に進行していくと考えられる。2000年の国勢調査の結果によると、20～34歳の未婚率は男性で68.2%、女性で55.5%にのぼる。2005年の調査では、生涯未婚率は男性で15.4%、女性で6.8%である。未婚化が引き起こす問題としては、婚外子の出生率が低い日本では少子化が進行することや、単身世帯はリスクに脆弱となるので経済格差が拡大することなどが考えられる。

未婚率は高いのだが、結婚願望も依然として高い傾向にある。しかしながら未婚化が進行していくという、その要因には男女間におけるミスマッチ、経済格差や学歴格差、男女共に根強く残る専業主婦志向が関係しているだろう。そのような中で、山田昌弘によって提唱され、マスメディア等でも取り上げられる機会の多くなった「婚活」とは、どのようなものか、「婚活」を行うことで未婚化が解消されるのか、婚活の1つであるカップリングパーティーの事例に触れながら述べる。

#### 〈大野論文への批評〉

婚活パーティに関するレポートは非常に興味深かったが、私は婚活パーティが未婚化を防ぐ有効な手段であるとは感じる事が出来なかった。いくつかの条件にあった異性を結婚相手候補として認める事が出来るのか、と疑問を感じるのは私が結婚をまだリアルに考える事が出来ない22歳だからかもしれない。しかしその22歳の現在でも、決まった条件はなく好きになった相手と結婚したい！と思うわけではない。学歴も生活水準も自分と同じくらいの方がいい、というようなおそらく30代になっても持ち続けるであろう条件に加えて、若さ故に、オシャレであってほしい、背が高い方がいい、というような理想も加わる。そのうえ私の周りの友人では現在交際している相手と結婚を考えている人や、次に交際する人は結婚を考えられる方がいい、という人が少なくない。つまり結婚をかなり早い段階から意識している（実際結婚するかどうかは別にして）若者が少なくないことから、22歳23歳であっても「簡単に交際できない」気さえする。未婚化も興味深いだが、この論文を読んだことでさらに自分たちに密接に関係した20代前半世代の交際への意識にも興味がわいた。（三崎）

まず初めに、「未婚化」という現象をテーマにしたこの論文に興味をもった。それは、この「未婚化」という現象が、私が執筆した卒業論文のテーマである「ドメスティック・バイオレンス」と同様、男女間における現象であり、また「結婚」という共通のキーワードをもっているからである。さらには「婚活」という、近頃よく耳にする話題ではあるものの、その実態や効果についてはあまり知られていない事柄とリンクして論じているため、ますます興味深いものとなった。私自身、結婚願望が強く、またこの論文でも見受けられるように現在でも多くの方が結婚願望の強さを表している。しかし現在の社会には「晩婚化」という現象が生じている。「婚活」という事例を挙げることで、こうした矛盾を分かりやすく解き明かしてくれる論文であったと思う。それと同時に、男女間におけるミスマッチ、男女差別といった「晩婚化」、「未婚化」の要因とされる問題を

身近なものとして受け止め、自分自身も「未婚化」の渦に飲み込まれないように気を付けたいと思わせてくれる論文であった。(宇多川)

実際にカップリングパーティーに参加するなど、この卒業論文に対して積極的に一生懸命努力してきたことが伝わってきて感心しました。お疲れ様です。

やはり、実際に自らが、参加したパーティーでの話や具体的な数字を使ったデータがあったので全体的にも非常に説得力のある論文だったと思います。

就職して働き始めたら自分は「結婚」に対してどのように捉えるようになるのかと、大野さんの論文を読んで改めて考えさせられました。就職活動のときに始めて自分の結婚について真剣に考えましたが、私自身は別に女性が稼いで、男性が家事をするというスタイルもいいと思いますし、共働きというのも良いとおもいます。

仕事と結婚してからの生活、両方とも諦めずに実現できる環境が、今後もっと整っていったほしいなと思います。(松崎)

評者(50代男性)は、20数年前にパートナーと同棲生活を始めた。二人とも30代くらいまでは仕事が忙しく、半分は単身赴任状態だったが、遠くを互いに往き来することは大変でも、充実した年月だった。社会的には理解されないライフスタイルだが、私たちは家事を互いに分担し、互いの親をサポートし、互いのキャリアを妨げず、高め合う生活を貫いてきた。本論文でも指摘されているように、男女ともに根強い専業主婦志向がなくなる限り「未婚化」はとまらない。しかし、この家族制度を打破する勇気と創造性を、今の日本の若者たちに私は期待できない。(鶴飼)

## 宇多川脩平

「ドメスティック・バイオレンス ―愛するがゆえの暴力―」

キーワード：DV（ドメスティック・バイオレンス）、  
暴力、サイクル理論、加害者、被害者

DVとは、配偶者あるいは恋人関係にある相手からの暴力である。身体的な暴力、精神的な暴力、性的な暴力とその形態は様々であり、またそれはある特定的人格や性格をもった人間が原因となって起こるのではなく、相互の親密な関係が引き起こす問題である。DVにはある一つの理論が存在する。それは暴力のサイクル理論と称されるもので

ある。加害者の緊張が高まる第一期、その高まった緊張が爆発し、暴力となって放出される第二期、その暴力に対する謝罪と愛情に満ちた第三期が一つのサイクルとなって循環される。そのサイクルこそが、DVという問題の潜伏を助長してしまう一つの要因となる。

無論こうした問題を野放しにしているはいけない。加害者の意識に呼びかけると同時に自分がDV加害者であるということに自覚をもたせ、それまでの行動を改めさせなければならない。しかし何より大切なのは、まず被害者を救うことである。すべての人が人を人として尊重することができれば、DVという問題はなくなるかもしれない。

#### 〈宇多川論文への批評〉

今日、テレビのニュースからは毎日のように虐待死、親の殺害、元恋人の死体遺棄といったトピックがあり、この論文のテーマは現代の社会問題を取り扱った大変興味深い内容だった。ただ、映画「DV——ドメスティック・バイオレンス」とドラマ「ラスト・フレンズ」を見て前章までで述べた研究してきたDVにおける事実や現象とどのような関連性があるのか論じているが、2つの映像はノンフィクションであるかどうかかわからず(私自身調べた限りそのような明記はなかった)、ノンフィクションであっても誇張表現が含まれるかもしれないし、当事者が発言しているドキュメンタリーでなければ真実は見えてこないと感じた。実際に関西でもDVの相談窓口があるので(例えば大阪府女性相談センターなど)、職員の人にインタビューしたり、実際に被害者に会いお話を伺った方がよかったのではないだろうか。問題解決策に関しても具体的さに欠けていたので、少し不燃焼さが残る論文だった。(久我)

DVという今日目をつむることのできない題材をストレートに選択した宇多川君にまず感心した。私自身DVの知識は何となくあるものの、どのような現状であるのかはあまり把握していない。この論文でDVの背景や現状を少しは理解できたのではないか。筆者の「DVに苦しむのはお互いの関係が感情共同体であるからであろう。感情共同体という深い関係でつながった相手だから、暴力のサイクルを感じながらも、どこかで相手を信じていたという感情があるのだろう。」という理論もわかりやすく進んでいき、理解しやすかった。なかでも、男性である筆者が男性優位、女性従属という昔ながらのしがらみも掘り下げて記してくれたことも女の私としてもうれしい。第4章で、最近DVがメディアでも注目されていることに着目し、私たちにも身近にDVが存在することを危惧してくれている。「加害者が加害者である、被害者が被害者であるということ

認識することがまず第一歩である。」圧倒的に加害者になりうる“男性”の性別である筆者がこのように訴えている。DV を自分の身近な問題であることを認識できる筆者のような男性が増えてくれることを願う。(森)

この論文はドメスティック・バイオレンス、特に家庭内での男性から女性への暴力について述べられている。なので、私は、一女性の立場として、つまり、DV の被害者になるかもしれないという視点をもってこの論文を読んでいこうと思う。

私が注目させられたのは、「DV というものはある特定の人格や性格を持った人間が原因になっているのではなく、それが引き起こされている相互の親密な関係ゆえに起きているものだと考えられる」との記述である。私は、DV の被害者・加害者共に、そうなりやすい傾向、つまり共通像があると思っていたからである。そのような偏見こそが、社会のDV への理解度の低さであり、対応の遅れであるのなら、意識を変えていかなければならない。

そして、DV が起きてしまった場合の加害者が立ち直るまでのプロセスがもう少し具体的に書かれていると良かったかと思う。(大野)

人は誰でも自分を尊重してほしい自然な気持ちをもっている。しかし、家の中で男が女よりも優位に立ちたいという「本音」は、家父長的な家族制度の産物である。いったんそれが通用してしまうと、合理的に説明不可能な感情であるから、それを押し通すために男性は（物理的であれ非物理的であれ）女性に対して暴力をふるうことになる。暴力を受けた女性が男性に（経済的であれ精神的であれ）依存している場合は、しばしば暴力を容認してしまい、連鎖的に、母は暴力に甘んじる子どもを再生産してしまう。DV とは決して特殊な現象ではないことを知るべきだ。(鵜飼)

### <鵜飼から全体への講評>

自分の好きなテーマについて卒業研究ができるという理由で、鵜飼ゼミに入ってきた皆さんですが、自分がやりたいことは何だろうかと考えると、意外にそれは自分でもわかっていないものです。ましてや、それを研究テーマにして論文という専門的な表現形式にすることは苦しいことでもあります。私が卒論にもっとも求めることは、専門的レベルの高さというよりもむしろ、自分の「本音」をその中でどこまで表現できているかということです。それを引き出そうと、ずいぶん一人一人に厳しいことも言いました。以上の意図を理解していただき、新しい出発の基点にしてもらえたらと思います。